

Museum der Kulturen Basel 収蔵の 琉球染織品の調査報告 — 紅型資料の調査報告 —

平田 美奈子

Research report on Ryukyu textiles collected in the Museum der kulturen Basel in Switzerland.

— Research report of BINGATA material. —

Minako HIRATA

1. はじめに

本稿は、2017年8月に行われたスイスのMuseum der Kulturen Basel（以下、MKBとする）に収蔵されている、琉球染織品調査の報告書である。

今回、三週間もの長期にわたる調査が実現できたのは、一昨年の2016年3月18～20日の三日間、スイスで開催されたチューリッヒ大学主催による型紙国際シンポジウムに柳教授と共に招聘されたことに始まる。型紙国際シンポジウムは、近年ヨーロッパで関心が高まっている「型紙（伊勢型紙）」をきっかけに開催された。シンポジウムでは、ヨーロッパ各地の型紙を所有する博物館・美術館等の学芸員や、日本からは染織関係の研究者が集まり、型紙をテーマに、ヨーロッパにおこったジャポニズムの影響や、日本の染織文化についての発表・意見が交わされた。今回、MKBへの染織品調査が実現したのは、企画者であるチューリッヒ大学のトムセン教授のご厚意によるシンポジウム後の型紙見学を調整して下さったことがきっかけとなっている。その時に、目的であった紅型型紙の閲覧以外に収蔵されていた琉球染織品を合わせて見せていただくことになった。MKBの染織品は、国内で収蔵されている資料以上に保存状態が良く、驚き感激した。今回の琉球染織品調査はその時の見学がきっかけであり、今回の依頼で、収集後改めて個々の資料への詳細な調査が行われた。

2. 資料の概要

MKBは、スイスだけでなく世界各国の習俗や伝統を造形資料として蒐集した博物館である。博物館が収蔵する約35万点の資料は、染織品が約5万点にのぼり、各地の様々な伝統的なテキスタイルがコレクションされている。

琉球関係資料の詳細は、ヨーゼフ・クライナー氏によるヨーロッパ各地に渡った琉球関係資料をまとめた『Sources of Ryukyuan History and Culture in European Collection』（文献1）から、入手の年度や回数と蒐集者、資料の形態や点数（若干の誤差はあるが）などが確認できた。琉球関係資料の点数201点は計8回に渡り収蔵されており、一点の「楽器（サンシン）」以外は染織関係資料（布類以外に、織布裂帳や実寸サイズの織り柄デザイン紙が含まれる）であることが分かった。これら琉球染織品は、見学当初の数からは想像を超える量であった。紅型に関しては、様々な形態・染色技法（表1・2）や、これまで確認したことのない資料も含まれていた。また何よりも資料の状態が良く、充実した調査を行うことができた。

紅型資料の収蔵時期は、琉球染織品全体の計8回の内、Collection5(1956).6(1957).7(1963).その他1回の、計4回となっており、第一回目のCollection1の1853年から約100年後になる。最初に収集された琉球の品は、資料内容を確認すると一点の楽器であることがわかった。その後の3回の収蔵品目には、織物関係資料が計9点入っている。紅型が収蔵された5回目には、一度の収蔵点数が114点と増えたことが確認でき本格的な琉球染織品収集がはじまったことが分る。

本稿は、琉球染織品調査の内、筆者が担当した紅型を中心にまとめたものである。

3. 調査方法

染織品の調査は、筆者がこれまで行ってきた県内の染織品調査、国内の紅型資料に関する調査の中で確立した方法で進めた。基本的な調査・採寸・記録・撮影等の内容と詳細は、以下の方法である。

観察調査

染め技法（大別・染色・地染め・型送り寸法）

模様（文様）

色（配色・地色・色材の種類）

繊維素材（状態・織技法）

形態（仕立て・使用者・用途・使用時期）

保存状態

備考

資料採寸

概寸（丈／縦・裾／横）

布幅

各部採寸

資料設計図（着物・裂・ウチクイなど）

資料の撮影

全景・部分・拡大

赤外線調査と撮影

- ・調査結果をもとに、以下の順で名称を付けた。

【 素材－地色－主だった文様「～模様」－大別－形態 】

- ・布幅は反物幅とし、布を断ち切り使用したものや袷仕立てのため布端が縫い込まれるなど、布幅が確認できないものは表記していない。
- ・型送り寸法は、小さい裂で模様が一部分しかない資料や小紋の連続柄や重ね型（臚型）で模様が複雑なものなどは表記していない。

4. 調査と考察

紅型資料数

調査の結果、MKBの紅型資料の各形態と点数は以下のように再分類できた。

当初予定し計画した調査日数は、現地での調査中に資料点数が大幅に増えたため、期間内で終了できなかった。そのため紅型の型紙資料は、次回の調査とした。

形態別分類

表 1

形態	点数	詳細
着物	13 点	内 2 点の紅型は織物の袷着物の裏布
ウチクイ	2 点	博物館では「裂」に分類されていた資料 1 点含む
裂	15 点	元々着物形態であったものの一部分
型紙	9 点	※今回調査せず

技法別

表 2

形態	点数	詳細
型染め	28 点	着物・裏地・裂に分類する資料
筒描き	2 点	形状・用途の異なる 2 種類のウチクイ
道具	9 点	型染め技法に使用

一点の資料から、様々な特徴を確認することができた。以下に、それぞれの資料の特筆すべき事項をまとめた。

下記に、着物・裂・ウチクイの各形態別に示す。

4-1 着物資料の特徴

【他資料との共通する柄模様】

IId6041

全体的に退色が見られず、地色の藍が瑞々しく美しい。着用感がなく、保存状態の良い着物である。模様への配色に注目すると、模様一パターンの中央に置かれた鶴文に特徴を見出せる。この模様の主模様である鶴文は、若紫一色のみで配色された方法が効果となり、画面の中で存在感を持っている。この着物柄と同柄の紅型を、日本民藝館収蔵の紅型見本の中に見つけることができた。両者の柄は、使用されるモチーフや模様構成だけでなく、鶴文への効果的な配色方法も同じである。筆者がこれまで見てきた、模様と配色に近い同例の中でも稀である。もう一方が見本の形態である点から考えると、同一工房で染められたものと推測できる。



MKB/6041 着物部分



日本民藝館 / 紅型見本

Ild6042

鮮やかな色彩が残る、保存状態の良い子供用着物である。生地は、経緯糸に木綿・苧麻の異素材の糸で織られており、紅型を染めるために準備された生地としては珍しい。着物は、柄のモチーフや模様の大ささ、模様構成、配色や染めの技術等素晴らしい。日本民藝館に同柄の紅型着物が存在するが、民藝館の紅型は、白地上げで配色も全く異なる。しかし、こちらの着物も同様に気品のある丁寧な仕上がりとなっており、どちらも印象に残る美しい着物である。



上：MKB/6042 子供用着物

右：日本民藝館 / 紅型見本

(カラー口絵あり)



Ild4800

この紅型は、大輪の牡丹に葉の向きで流れを構成した大胆な構成が特徴的な模様である。この模様は、他にも同柄の着物が存在しており沖縄県立博物館・美術館を始め、東京国立博物館等の機関に収蔵されている。これら同じ柄の着物の共通点は、上記した大胆な柄に赤色を基調とした彩色にある。また着物の形態だけでなく同柄が彫られた型紙も多く、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館の鎌倉芳太郎紅型型紙資料には4点、その他の紅型コレクションにも確認でき、同柄型紙の存在からもこの模様が好まれ多く染められていたことがわかる。その理由



を探ることでこの資料の存在は、模様や柄についての好みの傾向や時代背景の影響、衣装製作の傾向を模索する上で、紅型の新たなテーマのきっかけとなる有益な資料と言える。

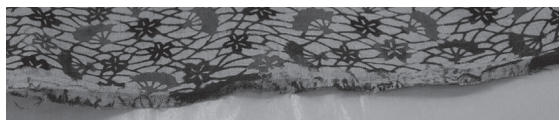
MKB/4800 着物部分

【紅型製作・技法の特徴】

Ild4916

この着物では、布端に記された墨書の存在が着目点としてあげられる。筆者がこれまで調査してきた着物の中では確認したことのない例だが、布に記された文字資料に関しては、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館が所蔵する鎌倉芳太郎・紅型資料と日本民藝館それぞれが所蔵する紅型見本で確認している。その文字からは、見本製作に関係する年代や実在する紅型製作者の名が確認でき見本製作に関する内容である。その他には、中国・北京故宫博物館院が所蔵する琉球関係資料の中に文字を見ることができる（「琉球王朝の秘宝」沖縄特別展覧会・平成16年）。進貢品・献上品として中国明・清代に渡った紅型の反物には、布が織られた地名・布や糸の情報など、織物に関する情報が記されている。どちらも布端に文字を記す状況は似通っているが、道具である見本と反物という形態が異なる。4916の文字は、着物の布端部分に文字の縦半分が断ち切られている状態であった。そのため判読できないものの、文字が布幅の三分の二の長さある情報量の墨書きが確認できる。資料の状況から文字内容は、反物の時点で記された文字

と考えられ、後者の内容である可能性が高い。



MKB/4916

裏裾部分・墨文字

IId6045

模様一パターンの中には、葵文と流水文・数種の草花文を添えた花籠の二つの主模様が交互に配置されている。紅型では、比較的大きな柄に分類される模様である。配色は、紅型特有の技法である隈取りを行っていないことが特徴的である。隈取りをする配色の黄色・緑に隈取りをせず、元々隈を取らない色に敢えて面積の大きい模様に置くことで独特な雰囲気に仕上げている。この方法は、模様の立体感を抑えることで、個々の模様の形を際立たせるよう効果を狙って行ったと考えられる。

【使用する生地素材について】

IId4915

紅型が染められた生地に、注目をした。表地に使用した絹布には、無撚りの経糸に強撚糸の緯糸が使われている。そのため、細かいシボが感じられる縮緬となっている。沖縄では、このような布は織られていないことから、沖縄以外からの生地への購入が考えられる。裕仕立ての着物の裏地には、赤の木綿布が使われ、衿・袖口のみ絹布を使用しているが、色は同じ赤で統一している。

IId6046

この着物資料は、染めの技術や完成度などに荒さが目立つが、着物全体がまとまっており決して悪い印象ではない。柄は、完結模様の型で模様を置いているため連続模様のように繋がっていないが、着物の中で模様の流れは途切れて見えない。また配色方法は、荒く大雑把に見えるが、模様や色の持つ全体の印象に助けられて、小気味の良い着物柄になっている。生地は、見頃の縫い合わせから幅広の布地を断ち切り反物として使用したものだと思われる。その布は、糸の撚りや布の状態から近代に織られたものと考えられる。

【配色方法や色材の選択方法】

IId6044

この着物資料は、白地の画面全体に竹文が地模様として構成されている。この着物の柄は、水色のみで配色したシャープな細い線で表現した竹文の上に色とりどりの丸い花びらの梅文が散らされ、両者の対照的な模様表現と配色方法とで、それぞれの役割を明確に表している。この模様は、本土の型紙の影響を強く受けており、本土の型染め方法であれば藍一色で仕上げる前提でデザインされた模様でその特徴が残るが、紅型染め独特の配色により紅型になりきっている。

青系色材としては、地模様の竹文・紫の梅文に藍、小さな梅文の配色にはベレンスの青色色材を選んでいる。このように紅型の配色は、華やかさだけを求めるのではなく、色選びによる模様の見せ方をも巧みに調整して、一つ一つの色を丁寧に染めている。



MKB/6044 着物部分 (カラー口絵あり)

IId6043



この着物柄は、流水から立ち上がる波頭とその間に重なる様に配置された大きな垂れ桜の樹を中心に、完結模様で大胆に構成している。その模様は、若紫一色のみで配色されている。さらにその模様には、淡色の藍による水色の地色が重ね染めされ、その染色方法により模様は地に溶け込み、地模様としての役割を担う形となっている。この方法は、紅型では得意とする技法である。この柄の色材には、地色に藍・配色にベレンスの二種の青色を使用している。

MKB/6043 着物部分

【衣装の形態について】

IId4901

保存状態の良い資料が揃う収蔵品の中で、唯一退色の目立つ着物である。注目したのは、両脇と前身頃と衿の縫い合わせの衿位置に縫い付けられている 1.7cm 中の細紐に、本土の染め布が使用されている点である。破損は激しいが、友禅による糊防染で表した模様には、ごくわずかだが鮮やかな色の絹の刺繍糸や繊細な



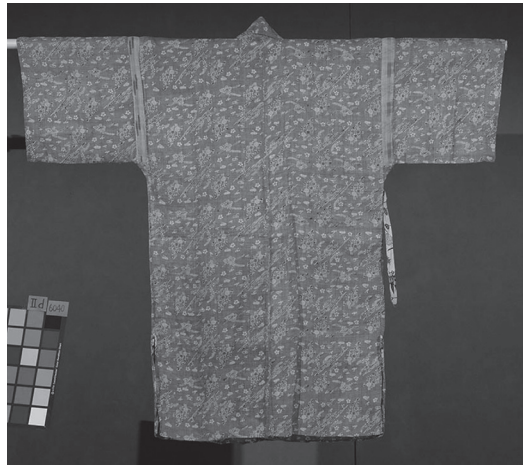
MKB/4901 着物紐部分

筆書きの細い墨線が美しく残っていた。

胴衣に付けられる紐に共布を使用するとは限らず、異なる紅型柄や技法はこれまでも見られた。しかし、どのような経緯で本土産の染め布が持ち込まれ、紅型衣装の一部に使用されたのか興味を引く資料である。

IId6040

この着物は、袖付け部分に異なる素材・技法の布を縫い足した構造をしている。その部分は、左右異なる大きな緋柄の布で芭蕉糸を素材とした織布を使用している。これまで確認した紅型衣装（表）に別布が使用される理由には、生地への損傷による一部分への接ぎ合せや使用頻度による形状破損のための仕立て直し、あるいは時代による着装方法の変化での衣装形態の仕立て直し、サイズ直しの際の生地の不足分を補うことなどが考えられた。この着物資料は、生地への破損や顔料・染料の退色はなく良好な状態である。形態は琉装の上着で、脇開きの根元には脇に付けられた細紐と同柄布



MKB/6040 着物（カラー口絵あり）

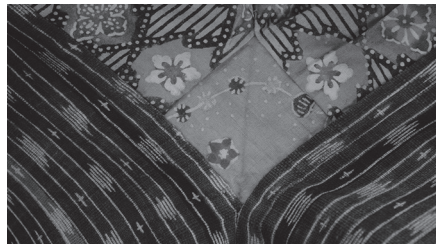
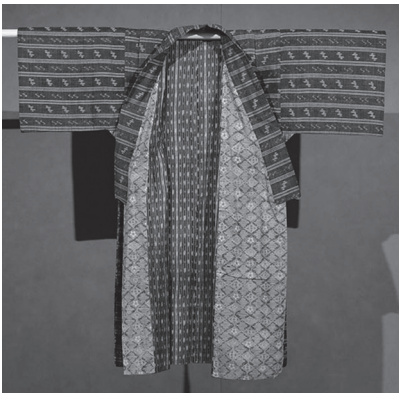
によるパイピングが確認できた。上げの跡などの若干の直しは見られるが、大幅な仕立て直しはない。この状況から 6040 の衣装形態は、時代の変化や日本・本土からの影響を受け仕立て直したことが理由ではないと考えられる。袖付け部分の緋布は、デザインとして縫い足されたものであろう。

IId6025

この織りの衿着物には、裏布に紅型布が使用されている。表布は、知花花織り技法で織られている。紅型布を裏地として使用する花織りの着物には、読谷山花織りが知られているが、近年技術が復活した知花花織りの衣装形態も裏地に紅型を使用する点は同じである。しかし花織り技法で織られる両織物には、若干の異なる技法も存在し、その一つが裏布に使用する紅型の選定にも表れている。知花花織りは、現存する資料数の少ない織物であり、ともに衿として使用される紅型を調べる上でも貴重な資料である。

IId5259

この緋織りの着物の裏地には、三種の紅型布が使用されている。通常一般的には、紅型を衿着物の裏布に使用する形態において、一種類を使用した形態が多い。稀にこの資料のように、二種類の紅型を使用する例はあるが、ワチスビのように 5cm 四方の小さな裂に別布を使用する理由が単に生地不足ではない意図を感じる。



左：MKB/5259 衿着物

上：MKB/5259 裏地三種

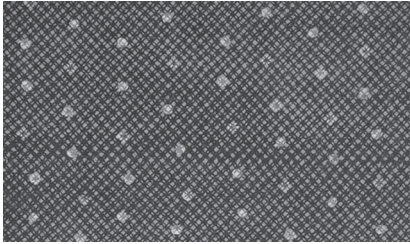
(袖・身頃・ワチスビ部分)

4-2 裂の定義と特徴

基本的に裂状の資料は、模様・配色等の見本として染めた布か着物の一部をカットした裂の二種類に分類できる。MKBに収蔵された「裂」に分類されている資料は、調査した結果から、着物の一部をカットした小裂と着物を解いた状態の一部分の比較的大きな裂が確認できた。その中には、紅型裂が商品とした形跡が残る資料も含まれていた。以下に特徴を持つ紅型裂を紹介する。

【裂に残るラベルと印】

IId4666・IId6047・IId6048



MKB/6048 裂部分

裂資料の小紋三点は、夏衣装の一部であった裂の6047と、冬衣装で元袷着物の一部分に使用されていた裂の4666と6048に分類できた。前者は、苧麻素材の織り生地を使用しており、両面染め技法による藍を基調とした染物。後者の裂2点は、木綿素材を厚手に織った布を使用している点や重ね型（臚型）の柄の特徴から、紅型衣装の典型的な形である袷着物に使用される紅型布であることがわかる。どちらも断ち切られているが、着物のどの部分（4666/ 衽から前身頃にかけての一部 6047・6048/ 襟付けが閉じられた前身頃部分）かが特定できた。興味深い点は全く同じ部分6047と6048の裂である。収蔵も同時期の2点のうち6048には、裏面にラベルが貼られていた。このようなラベルは、これまでの調査で確認したことがないものである。ラベルには、「フオルムアルデヒート瓦斯體消毒」「京都府令ニ依る」「消毒済之證」「株式会社京都消毒保険社」の印刷と、その中央部分には「17.3.28」とスタンプが押されている。その内容から、裂には虫菌害防除が行われたようで、一般的な紅型蒐集品とは異なる扱い

裂資料の小紋三点は、夏衣装の一部であった裂の6047と、冬衣装で元袷着物の一部分に使用されていた裂の4666と6048に分類できた。前者は、苧麻素材の織り生地を使用しており、両面染め技法による藍を基調とした染物。後者の裂2点は、木綿素材を厚手

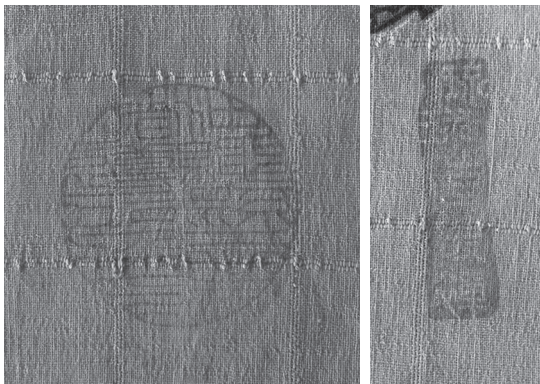


MKB/6048 裏ラベル

がされていたと考えられる貴重な情報を持つ資料である。また、連番で同年収蔵の同じく小紋柄の6047の染布裂にはラベルはないが、6048と条件が揃っている。このような資料の存在を元に、紅型裂の蒐集方法や状況を探る手立てとしたい。

IId4667

紅型裂には、柄内に押された二点の印の内容から紅型染め商品として販売されていたと思われる資料があった。この資料は、長方形の枠内に「琉球□友禅」とある印と、正円の中に八方に広がる独特の書体で「沖繩」しか判読できないものがあり、それぞれの印は形も大きさも異なる。そのほかにこの資料は、額に入っていた様子の残る退色が確認できる。また上部には、もう一パターン逆向きの模様が置かれており、その模様は中途半端に切れている。一見するとその状況は、ちょうど肩から柄の天地が逆転して染める着物製作の型置きと同じである。しかし、元々着物だったと考えるには使用している布地は衣装用に使用できるものと



MKB/4667 裂 印1・印2

考えにくい。または商品として考えた場合、この柄の付け方では生産効率率は求められない。この資料の染め技法は、紅型風ではあるが紅型染めとは言い難い点が見られる。この資料は、紅型が様々な形で求められていた時代の資料として位置付ける。

【元同衣装から裂となった資料】

IId4788・IId4789・IId4794

collection5（1956年）の資料の中に、裂が数点まとめられ「Collection of 10 example」と記された白紙に挟まれた形で収蔵された資料がある。このセットの中の数点に、模様・色合い・使用される布地素材に、見覚えのある裂（4788・4789・4794）が存在した。その紅型は、記憶通り国内で多数の紅型を所有する

機関の資料の中に確認することができた。上記した特徴に加え、顔料の退色具合や使用する色料、染め技術の程度や布素材などに共通する箇所が多く見つかった。



多くの共通点から両者は、同じ着物を裁断し分けたものと考えられる。今後の調査として、使用している色材や生地の状態・織り密度などの精密な調査を加え、両方の共通点を明らかにしたい。このような例は、極々稀に見ることはあるが、元は一つの着物であったものが断ち切れ、海を渡り遠い異国の地に存在し、新たに繋がることに調査の意義を感慨深い思いで感じる。

MKB/4788～4797 (4793 不明) 裂セット

4-3 筒描き技法による資料の特徴

IId4798

4798 の筒描き技法の資料は、MKB では裂に分類されていた。この資料は、松竹梅のモチーフを正円状にした構成や、模様への配色方法や紺の地色、筒描き技法による線模様など、基本的なウチクイの特徴を持つ。しかし一般的に見る正方形のウチクイとは異なり、長布に模様が二パターン染められている。当初は、一般的な正方形のウチクイと異なるため、その形状を考慮し裂に分類されたと理解した。また、同じ柄が二点並び染められている状況については、二つ同時に染め上げ製作しその後裁断されていない状態のまま収蔵された資料だと考えた。しかし模様は、左右対称に描かれ染められている。その点に、同じ模様を連続して二点染め上げる製作方法と異なると気づいた。

長方形のウチクイでは、儀式用の長盆の上に掛けて使用する小型のものがある。4798 と日本民芸館に収蔵されている長方形のウチクイ三点・芹沢銈介美術館の一点との大きさ・縦横比は変わらない。しかし柄構成は、長方形の形を生かして構成され、4798 の正方形の正円形の模様が二つ並ぶ模様とは印象が異なる。これまでに例のない特徴的を持つ 4798 のウチクイ資料は、新たな使用方法について

て調べるための貴重な資料である。

MKB/4798 ウチクイ
長布形



IId4799

典型的な、祝祭事に製作されたウチクイである。基本的な構成は、正方形の布の中に大きな正円状の模様が置かれ、中央には家紋や鶴亀の丸紋が置かれる。鶴亀紋に関しては、幾何学的なデザインの家紋に比べ線が多く模様も複雑なことから、型紙を使用し模様を置き染める。しかし、本資料では外円の松竹梅模様と同じく筒描き技法で描かれている。

4799には、柄も大きさも同じ資料が存在する。中央の柄が家紋であり生地に麻を使用する点など異なるが、モチーフ・模様構成・配色まで同じある。そのウチクイは、説明によると城間栄松作である。梅文の中心部分の表現や配色の一部に若干の違いは見られるが、二種の太さの異なる線の使い分け模様の描き方配色の組み合わせ・方法などの細かな表現に共通するものが感じられる。この二点のウチクイは、城間氏が製作したと思われる時期よりも4799が早い時期の蒐集であることや、古いウチクイ生地に使用されている苧麻布使用であることなど相違点の比較から、4799の製作が先行していることがわかる。



MKB/4799 大ウチクイ

4-4 まとめ

今回の調査は、この報告書でまとめた紅型染めだけではなく、同時期に蒐集・所蔵した織物資料の調査も行っている。そのため、紅型染めに使用した生地に関する繊維素材や糸の状態・布製作や生地の種類に関する専門知識をいただき、より充実した調査となった。

MKB が収蔵する紅型資料の総合的な特徴は、保存状態が良い点である。資料の劣化は避けられないが、状態の良い資料の存在は今後の研究が深化する上で多くのヒントを得ることができる。また着物や裂資料の中に、国内の紅型と共通する資料が確認できたことも紅型研究を進める上で貴重な資料となる。着物であったことを示す跡が残る裂資料には、退色し生地の具合にも着用感の残る裂から鮮やかな色が残る状態の良い裂まで幅広くある。パーゼルの資料は、着物から裂の状態になる原因や動機などへの疑問に関する新たな手掛りとなった。さらに、ラベルや印鑑の情報や国内と同じ資料の存在は、紅型を求める様々な需要に合わせて紅型裂を商品として当時売買できる市場があった新たな例として確認できた。改めて、小さな裂の中にも多くの情報があり、それを読み取ることの意義を感じた。

これら資料の研究・まとめはこれからであるが、MKB の琉球染織品が今後の紅型研究にとっての重要な資料であることが言えるだろう。

5. 最後に

MKB の紅型資料は、保存状態は特筆すべきものの、総合的にみた印象はこれまで調査した紅型資料との大きな差は感じられなかった。資料から得られた模様構成・色材・配色などの総合的な情報から、琉球王朝末期から明治年代に製作された紅型が中心であると考えられる。しかし今回の調査では、改めて色彩豊かな紅型の美しさに身が引き締まる思いがしたことは率直な感想である。MKB の資料は、経年劣化による退色は感じられず、保存状態は良好であった。おそらく収蔵後の変化は少ないと考えられる。琉球の染織品に関する認識や扱い方等の知識が十分でない結果、展示等の使用頻度が少なかったことが要因のひとつにあげられるだろう。紅型は、琉球独自の染色文化が強く現れた染物である。一見して、日本あるいは中国・南方系の染色技術や道具類、モチーフなどの影響を感じるが、

それらの染色品に供されることなく取り扱われてきたことによるものだろう。琉球染織品をテーマとした展示はもとより日本染織の中で括られることがなかった点が功を奏したと考えられる。また着物の収蔵方法には、吊り下げ式での特殊な収蔵方法がとられ、生地へかかる負担が軽減された結果となっている。日本での一般的な着物類・衣裳の収蔵方法である、畳むことによる皺や型崩れ、紅型特有の顔料への摩擦による退色を避けられたと言えるだろう。

2016年の型紙学会へ参加した感想は、日本の美への関心の高さと紅型に対する認知度の低さという圧倒的な差だった。その結果が、収蔵当時の状態を保っている理由に少なからずとも関係していると想像できる。しかし今回の調査で、琉球染織品は数回にわたり意識的にコレクションされていることがわかった。すべての調査はまだ終了しておらず途中報告であるが、可能であれば今後も海外に渡った琉球染織品の詳細な調査を継続し、国内の資料にデータを加えることで、さらに紅型研究を充実させるよう積極的に研究を進めていきたい。

参考文献

- 文献1 ジョゼフ・クライナー (Josef Kreiner) 編集 1996年
『Sources of Ryukyuan History and Culture in European Collection』 p309～310

表3-1 Museum der Kulturen Basel

紅型資料一覽表

1956年 Collection 5 (20 items)

No.	収蔵番号	名称(素材・地色・模様・大別・形態)	形態	繰寸(h×w)	大別	技法	染色	型送り寸法	布幅	備考
1	4666	木綿緑地杵繫ぎに四露模様紅型裂	裂	54.5 x 30.3	紅型	臚型	片面染	—	—	衤一部
2	4667	木綿黄色地に牡丹山模様紅型裂	裂	118.5 x 38	紅型	地返し	片面染	—	—	印二種/毛描き技法
3	4788	芭蕉白地直浦流水葵鳥模様藍型裂	裂	44 x 16	藍型	白地型	両面染	—	—	衤一部/芭蕉布地使用
4	4789	木綿白地菊扇面短冊模様紅型裂	裂	44.8 x 16.5	紅型	白地型	両面染	43cm	—	衤一部
5	4790	苧麻花色地雲に梅松瑞雲七至開し模様紅型裂	裂	21.2 x 16.5	紅型	染地型	両面染	14.5cm	—	—
6	4791	木綿淺地桔梗流水模様紅型裂	裂	14.4 x 17.5	紅型	染地型	片面染	12cm	—	手付紅技法
7	4792	木綿葡萄地鉄線赤ニ模様紅型裂	裂	21 x 18.2	紅型	染地型	両面染	12.5cm	—	—
8	4794	芭蕉淺地雲に梅模様紅型裂	裂	42.5 x 23	紅型	染地型	片面染	21.5cm	—	芭蕉布地使用
9	4795	絹花色地雲に欄棧圖松模様紅型裂	裂	29 x 35	紅型	地返し	片面染	—	—	羽二重使用
10	4796	木綿染分地雲に桜松鶴流水模様紅型裂	裂	29.8 x 36.6	紅型	染分地	片面染	—	—	—
11	4797	木綿水色地雲に流水菊棧松模様紅型裂	裂	38.6 x 34.4	紅型	地返し	片面染	—	34.4	手付紅技法
12	4798	苧麻紺地松竹梅模様ウチクイ	ウチクイ	101 x 50	筒描き	染地	両面染	—	50	二柄縁き
13	4799	苧麻紺地松竹梅模様鶴龜丸紋ウチクイ	ウチクイ	117 x 115	筒描き	染地	両面染	—	40	—
14	4915	絹黄色地楓扇枳雪輪善物模様紅型着物	着物	114 x 122	紅型	地返し	—	46cm	—	縮縮布使用
15	4946	木綿淺地花模様紅型裂	裂	91.7 x 37.5	紅型	染地型	両面染	11cm	37.5	—
16	6025	花縮着物	着物	126 x 131	縮物	—	—	—	—	花織り技法
"	6025a	" / 木綿淺地杵繫ぎ模様紅型裏地	縮・裏地	"	紅型	地返し	—	—	—	裏地
17	6040	苧麻淺地梅桐葵露模様紅型着物	着物	106 x 122.5	紅型	染地型	両面染	13.5cm	31	両袖付根芭蕉縮布使用
18	6044	木綿白地竹梅模様紅型着物	着物	85.5 x 103	紅型	白地型	両面染	14cm	31	—
19	6045	木綿白地菊藤花籠篋員流水模様紅型着物	着物	134 x 129	紅型	白地型	両面染	49cm	37.4	—
20	6046	木綿淺地菊松松葵流水模様紅型着物	着物	123 x 117	紅型	地返し	片面染	43.5cm	—	木綿広幅布使用

形態別紅型資料数 着物 5点・着物裏地 1点 / 裂 12点 / ウチクイ 2点

表3-2 Museum der Kulturen Basel

紅型資料一覽表

1957年 Collection 6 (21 items)

No.	收藏番号	名称 (素材・地色・模様・大別・形態)	形態	尺寸 (h×w)	大別	技法	染色	型送り寸法	布幅	備考
1	5353	木綿花色地桜流水雪侍袴模様紅型裂	裂	94.7 x 34	紅型	白地型	両面染	19.2 cm	34	
2	6043	木綿芋麻浅地菊流水鳥貝枝垂桜模様紅型着物	着物	132 x 130	紅型	地返し	両面染	46 cm	35	

形態別紅型資料数 着物 1点 / 裂 1点

表3-3(1) Museum der Kulturen Basel

紅型資料一覽表

1963年 Collection 7 (16 items)

No.	收藏番号	名称 (素材・地色・模様・大別・形態)	形態	尺寸 (h×w)	大別	技法	染色	型送り寸法	布幅	備考
1	4800	木綿白地牡丹模様紅型着物	着物	134 x 118.5	紅型	白地型	両面染	20.3 cm	31	手付紅技法
2	4916	芋麻白地桜鳥繁文模様紅型着物	着物	127 x 133	紅型	白地型	両面染	12.5 cm	32	
3	4941	芋麻浅地海島鶴霞模様紅型着物	着物	131 x 121.5	紅型	染地型	両面染	13 cm	34.4	
4	5259	経緯緋袷給着物	着物	111 x 113	緋物					緋・緋織り技法
"	5259a	" / 花色地縮仁松花菱模様紅型裏地	緋・裏地	"	紅型	地返し	—	10.7 cm	—	袷・袖・手付紅技法
"	5259b	" / 深浅地縮仁緋模様紅型裏地	"	"	紅型	染地型	"	18 cm	—	前・後身頃
"	5259c	" / 花色地梅水草模様紅型裏地	"	"	紅型	染地型	"	—	—	ワチスビ
5	6041	芋麻浅地鶴松梅鳥模様紅型着物	着物	142 x 130	紅型	地返し	両面染	25 cm	36	
6	6042	木綿芋麻浅地鳳凰牡丹桐模様紅型着物	着物	106.5 x 82	紅型	地返し	両面染	48.5 cm	27	
7	6047	芋麻浅地菊繁文模様紅型裂	裂	248 x 37	紅型	地返し	両面染	10 cm	37	右身頃一部
8	6048	木綿花色地七宝繫き模様紅型裂	裂	242 x 34	紅型	地返し	片面染	11 cm	34	左身頃一部

表3-3(2) Museum der Kulturen Basel 紅型資料一覧表 1963年 Collection 7 (16 items)

No.	収蔵番号	名称(素材・地色・模様・大別・形態)	形態	縦寸(h×w)	大別	技法	染色	型送り寸法	布幅	備考
9	6132		型紙	型						
10	6133		型紙	型						
11	6134		型紙	型						
12	6135		型紙	型						
13	6136		型紙	型						
14	6137		型紙	型						
15	6138		型紙	型						
16	6139		型紙	型						

形態別紅型資料数 着物 5点・着物裏地 3点 / 裂 2点 / 型紙 8点

1	6039b	型紙	型							収蔵年代不明
---	-------	----	---	--	--	--	--	--	--	--------

※ 型紙資料の調査は行っていない

